離層

高原美遥

1

朝の光が眩しかった。どうしてこんなに眠ってしまったのだろう。レースのカーテンを窓いっぱいに開けると、朝日が部屋の奥まで差し込んだ。真夏の強い日差しの中で、秋子は突然身体中の全てが空っぽになる気がした。こんなに空虚な気持ちは初めてだった。連日真夏日が続いているのに、体が急に冷たくなった。

お互いに連れ合いのいた二十数年ぶりの再会だった。あんなに辛い失恋で、これまでも、ふとしたときに吉野を思い出すときはあったが……。ドライブの途中たまたま寄ったレストランで、まさか吉野に会うとは、吉野とは社交辞令のほかは何も話さなかった。秋子の心の中がかつて吉野だけで占められ、あんなに眠れない日々があった筈なのに、思いもかけない吉野の姿にドキリとしたが、秋子の顔色ひとつ変わらなかったのだろう。

夫の公平に吉野のことは、独身の頃の秋子が家庭科の教師として勤めた高校の同僚以外、なんでもない人のように思えたのかもしれない。でも、もし、吉野も秋子もお互いに一人だけで突然会ったなら、昔のように切ない気持ちになったろうか。そう自問してみたが、現在は難病を抱え、公平からすっかり支えられて生活し、行動範囲も限られている秋子には、もうそれ以上の気持ちは無かった。それよりも久しぶりの外出で疲れていたとは言え、吉野と会ったその夜に朝までぐっすりと眠ってしまった、秋子自身の心が哀しかった。身を焼け尽くすように、ひたすら吉野だけを思い続けていた日々はなんだったのだろう。今となっては、吉野に対して、まるでモノクロの映画を見ていたような距離感を感じてしまう。そう思えるぐらい年月が流れたと言うのだろうか。

恋愛は幸福を殺し、幸福は恋愛を殺す。誰の言葉かは忘れたが、吉野に恋をしていた頃に読んだ本の中に書いてあった言葉だ。確かにあの時、秋子は吉野の家庭を壊そうとしていた。しかし、最後の最後に吉野は妻を選んだ。秋子は失恋の痛手から逃げるように結婚し、もう二十五年も過ぎている。

四十五歳のとき秋子は自己免疫疾患という現代医学では完治が難しい病を患い、入退院

を繰り返している。病気になったのが寝たきりだった義父の介護の最中で、病の中でもなんとか義父を介護し見送った秋子に対する感謝なのか、秋子が病気になってから公平はすすんで家事を手伝い、今では秋子より冷蔵庫の中まで把握し、料理も驚くぐらい上手になった。

しかし、病気になったばかりの頃、ベッドに伏せていると、この病は妻のいた吉野を好きになったことの、天罰のようにも感じた。吉野は秋子が初任校の数学教師だった。職場の飲み会等には全く参加せず、面倒な仕事は上手に断り、勤務時間終了とともに、待ってましたとばかりに職員室を後にした。吉野尚三の名前から誰が付けたのか、吉野を「ショウエネショウちゃん」と笑いながら渾名で陰口をたたく同僚もいたが、それを知ってか知らずか、吉野は淡々と生きているように見えた。

2

「昔さ、近道だったこの精神病院の中庭をこっそり通って、中学へ通ったんだ。精神病でも状態がいい患者は庭の草むしりや庭掃除なんかしていて……。患者の中にいつも頭にトタンを巻いて箒を持ってぼぅとしている人がいて、どうも戦争で頭がおかしくなって、ピストルで撃たれる恐怖から、弾除けにトタンを頭につけているらしいんだ。

俺達はその患者に『トダンこ』って渾名つけて、トダンこ、トダンこってからかって。子供って、残酷なこと平気で言うよなぁ。戦争が無かったら病気にもならなかったのに」

薬の副作用から一時、足が不自由になった秋子のリハビリの為入院する温泉病院への最短ルートという道で、精神病院の前を通ったとき、公平は思い出したようにぼそっと話した。父親が病気になって失業し、中学生のとき、公平はこの精神病院近くの母親の実家で暮したことがあったらしい。

そうだ。確かにこの道だ。この精神病院の前だった。

大学時代の友人が交通事故で亡くなり、その葬儀の帰り道だった。昔はかなり郊外のような気がしたのに、今ではすっかり住宅地で埋められている。この精神病院の門から出て来た吉野の、秋子を見たときの驚きと哀しみの入り混じった眼を今でもはっきり憶えている。あの眼との出会いが無かったら、吉野との恋は成立しなかった。

お茶でもと誘ったのは秋子の方だった。吉野の悲しさを湛えた複雑な目を見てから、ど

うしてもこのまま別れてはいけない気がした。

「私、コーヒーはキリマンジャロが好きなんです。あの酸味とフルーティーさが……」

珈琲の味も解らないまま、自称珈琲通の叔父の受け売りをそのまま話した。吉野は怒ったように無言だった。秋子は吉野に声をかけたのを後悔した。なぜ、あのまま知らん振りをしなかったのだろう。気まずいまま吉野とは別れた。学校でどんな顔をしたらいいのだろう。精神病院には誰がいるのだろう。

四十数人もいる教員だから、幸いなことに吉野とは用事の無い限り話すことはなかった。まもなく吉野は度々休暇をとるようになった。養護教諭の森田が、声を潜め「吉野先生の奥さん、自殺未遂したんだって」と耳打ちした。

吉野にはたった一人の息子がいたが、中学生だった息子は友達数人と遊泳禁止の川で泳ぎ、吉野の息子だけが溺れて死んだ話をしてから「それでね。それから奥さんの様子がおかしくなって、家で暴れたりしているみたいなの。学校でもこの話は一部の人しか知らないから、黙っていてね」

そうだったのか。だから、吉野はすぐに帰っていたのだ。そして、あの精神病院にはきっと吉野の奥さんが入院していたのだ。それから数ヵ月後、試験で生徒たちが下校したがらんとした廊下で秋子は突然、

「あの日のことを黙っていてくれてありがとう」と吉野から頭を下げられた。

「妻が入院していてね。私も自分自身がどうしてよいものやら悩んでいて……」

吉野の言葉に秋子は不覚にも涙を零してしまった。

その日から、吉野は気さくに秋子に声をかけるようになり、妻を介護する誠実な吉野に秋子は好感を持った。秋子と話すときの吉野の嬉しそうな眼を見ると、秋子の心は弾んだ。吉野は秋子をドライブに誘った。きっと、妻は入院しているのだろう。吉野と会うたび、秋子には吉野の存在が大きくなっていった。しかし、吉野は妻を選んだ。あの時、それではなぜ秋子をドライブに誘い、映画も一緒に見たのだろう。吉野はただ淋しかったからなのか……。ただそれだけだったのか……。どうしょうもなく惨めだった。

秋子は退職し公平と見合い結婚をした。公平に身を焦がすような愛を感じたわけではなかった。吉野を忘れたかったからが正直な気持ちだった。公平は物足りないぐらい穏やかな市役所の戸籍係ですと冗談が通る地味な人で、秋子のことは今でも「秋子さん」とさん付けで呼ぶ。

子供たちも社会に巣立ち、また公平と二人だけの時間が流れている。公平も来年は定年退職を迎える。このまま数年後には子供たちの結婚があり、孫を可愛がり……。そんな穏やかな老後がきっと来るのだろうと思えた。

しかし、吉野と偶然に出会ったことと、その夜にぐっすりと眠ってしまったことが秋子の心に不思議な漣を立てていた。こんな動揺は公平と結婚してからは一度も無かった。同年齢の友人達が集まると決まって話題になる更年期の障害も、免疫疾患の為毎日ステロイド剤を服用しているからか、全く感じないで過ごしていた。でも、吉野と会ってからの秋子の心は確実に変化していた。

気が付くと何もせずただぼぅとしている。吉野を忘れようと苦しんだ日々が脳裏をよぎった。突然二十数年ぶりに会った吉野に、今更未練があるのだろうか。素直に心に問うてみる。無いともあるとも言えない気がした。そして、そんな日が数日続いた後、今まで経験しなかった空しさに襲われた。気持ちが沈み、何もする気が起きない。朝から着替えもせずベッドの中にいることが多くなった。精神が不安定になり、病気が悪化したのだろうか……。

3

「わぁ、秋子さんお久しぶり。どう元気だった」

免疫疾患外来は予約患者だけなので、いつも閑散としている。入院のとき同室だった恵美子が、トレードマークの大きなマスクをかけ待合室に入ってきた。

「ええ、なんとか……。でも最近眠れなくて。いつも家にいるから日中眠ればいいと思っても、お昼寝もなかなか出来なくて、たえず頭がぼおっとして思考回路ゼロみたい。気持ちまで滅入ってしまって……」

「そうなんだ。それって更年期じゃない。私ね。四十五才のとき突然不眠になったの。あの時、導眠剤を先生に処方してもらえば、こんなに病気が悪化すること無かったなぁと思うわ。秋子さん、今まで更年期障害で何か思い当たること無かった？」

「えぇ、今までは良く眠れていたし……。気持ちもこんなに不安定にならなかったし」

「秋子さん、最近、何か精神的ストレスあった？　血液検査の結果は？」

吉野のことを言い当てられたようで、恵美子の言葉にどきりとしたが、口ごもりながら。

「検査の結果はいつもと同じだし、ストレスも心当たりなかったけど……」
「じぁ、やっぱり更年期よ。先生に相談してみた？　林田先生、六十近いし、奥さんの歳だって更年期年齢だろうし、きっと、いい導眠剤出してくれると思うわ。私達の年齢って微妙複雑でしょ、若いお医者さんだと、気持ちの持ちようだなんて言って、更年期を理解してくれないで、その点……、林田先生はいいわよ。ところで、秋子さん、まだ生理ある？」
また、ドキッとした。恵美子は大きな目をくりくりさせて、いつも突拍子も無いことを臆することなく、平気で尋ねたりするのだ。入院中も「わたし田舎に住んでいるし、こんな時でないと都会の経験出来ないしね。悪くなってもお医者さん付きで安心だし」
すこし体調が良くなると外出許可をもらい、顔が隠れるでっかいマスクをして病院近くの商店街を歩き回り、まるで、少女が着るようなチロリアンテープのついた淡いピンクのパジャマを買ってきた。
「私、このパジャマで林田先生悩殺しよう」
「どう、先生可愛いでしょ。馬子にも衣装で美人になるでしょ」
決して美人とは言えないステロイドでムーンフェイスになったまん丸顔で、ゲラゲラと笑いながら話すと、いつも笑顔など見せない林田だったか苦笑いしていた。
「美味しそうなラーメン屋さんがあったから、こっそり食べに行こうよ」とある日、恵美子は秋子を誘った。
「お昼は食べないで、食べた振りして行こうね。お昼のメニューはちょうどラーメンだから、外で食べてもバレナイよ。病院よりきっとおいしいよ」
二人だけの病室で、難病とは思えない恵美子に、秋子もつい圧倒され、高校生が授業を抜け出すような後ろめたさにワクワクしながら行ったことがある。恵美子は席に着くなり、
「わっ、白いスープ。どうして白いの？」隣の席で食べていた豚骨スープを見て叫び、注文をとりに来た店員に聞いていた。店員はあきらかに恵美子を心の中でいい歳をしてこんなことも知らないの。と言う顔をしたが、
「なんでこんなにスープ白いんですか？」と追い討ちをかけるように尋ねると、今度は恵美子をどこかのラーメン屋の者かもしれないと、訝しげだった。
「恵美子さん、白いスープは豚骨だと思う」
「へぇ、そうなんだ。秋子さんは都会に住んでるから物知りだね。私のとこは田舎だから、ラーメンと言えば煮干醤油ラーメンしか無いしさ。コンビニまでだって車で三十分。お姑さんは家で作るのが一番の人で、外食なんて年に数えるほどで、ファミレスにしか行かな

いのよ。知らなかったなぁ」と、本当に吃驚している様子だ。
豚骨スープのあの時も驚いたけど、今回は秋子の隣に男性の患者が座っていた。「生理ある？」と訊いた恵美子の問に、秋子は頬が赤らむのを感じたが、小声で「もう、無いわ」というと「いつ終わったの？」と恵美子も小声で言った。
「一年ぐらい前かしら……」
「ふ～ん。そうか、一年か……。私とおんなじ頃なんだ……」
恵美子は暫く考え込んでいたが、突然、
「ところで秋子さん、男の人にまだトキメキ感じる？」
「えっ……」またまた恵美子は予測もつかない質問をした。
「私ね。最近、っていうか……。なんだか生理無くなったら、素敵な男性見てもときめかないの。ついこの間まではしっかりときめいていたのに。全く無くなったのよ。夫はそんなの嘘だろう。カッコつけてそんなこと言って、て言うのよ。それからね。
あの大岡越前が年老いた母親に『女はいつまで女なのですか』と、訊くと老母は何も言わず、火箸でひたすら火鉢の灰をかき回していて……。越前は女は灰になるまで女なのだと悟ったという有名な話があるじゃないか。ですって……。そして、とうとうお前だけが変なんじゃないかって言ってさ。
本当に私ばかりこんな考えなのかなぁと思ってね。今でも仲のいい高校の同級生達に、片っ端から電話して訊いてみたの。最初はね。生理ある？　って訊くわけ……。すると殆どの人が『そんなのもうすっかり無いわよ』というのよ。でも、中にはボチボチかなって言う人もいたりするんだけど……。そこで、ねぇ、男の人に今でもトキメク？　と尋ねるの。すると、恵美子の変な質問がまた始まったと言うんだけど、みんな『そう言えば無くなった気がする』って言うんだ。そこで私……。あぁ、自分だけじゃなかったんだって、安心したの。
女が灰になるまで男の人にときめくなんて、男の人がそう思いたいからなのかなぁ、と思ってしまうわ。もしかしたら、ほら、童話の『裸の王様』みたいに……。女の人はみんなもう生理が終わると男の人にはときめかないのに、トキメク振りをしているとかさ。でも、人によって個人差があるのかなぁ。秋子さんはどおぅ。トキメキまだある？」
「そうね。……わからないわ」
「わからないって言うことは、まだ有るんだ。へぇ、いいな。いいな。秋子さん女らしいし、美人だから、周りの男がホットカナイかもね」

「そんなこと無いわ。ただ、考えたことも無かったの」
吉野のことで最近精神が不安定だったが、トキメキとかには考えが及ばなかった。
「そうなんだ。考えたこと無いんだ。秋子さん真面目だから旦那さん一筋か、私ね、実はこの前の診察のとき林田先生に、閉経になったら男の人にちっともときめかなくなったんですけど、男の人は歳をとっても女の人にときめくものですか？　と訊いたら林田先生びっくりして、恵美子さん本当にときめかないの？　と反対に聞き返されちゃった」
その言葉に秋子は、外来の診察にそんなことまで訊くのかと、思わず笑ってしまったが、恵美子は真剣に悩んでいる様子だった。
いい歳をして、周りからはトンチンカンな人と思われているような恵美子だったが、吉野のことで心が重かった秋子には主治医の薬もいいけど、恵美子の天真爛漫さに救われた気がした。
処方された導眠剤は良く効き、効きすぎてふらりとすることもあり、秋子は最近一錠を半分にして服用している。それでも驚くほど眠れるようになり、隣室で寝ている公平は秋子には睡眠が一番の薬と思って、出勤するときも秋子が眠っていると声も掛けずに出ていた。

4

電話のベルが鳴っている。
公平は出てくれないのだろうか。こんなに朝早く誰なのだろう。秋子は遮光カーテンで薄暗くなっている部屋のドアを開け時計を見ると、もうお昼近くだった。
「あっ、秋子さん寝てたの？　具合悪いの？　起こしちゃってごめん」恵美子だった。
「ううん。そんなこと無いわ」
「朝御飯食べた？　ステロイド飲まないと駄目だろうし、また掛けなおすよ」
「ううん、いいわ。直ぐごはん食べられないもの」
「そおう。じゃ少しだけね。あのね。私、まだ少し、トキメキ有ったわ。ほっとしたと言うか、心がほんわかしたのよ。
実はね。中学の同級生が電話で、私の初恋の人が手術する病気になったっていうの。初恋の人の名前は谷川君って言うんだけど……。『皆んなどんな病気か心配しているんだ。

でも俺達は健康だから谷川に電話かけにくいしさ』って言うの。そこで治らない病気をしている私に、谷川君がどんな病気か訊いて欲しいと、連絡あったの。私、すっかりドキドキしちゃった。

こんな病気だから、クラス会になんていちども参加したこと無かったのよ。初恋のこともすっかり忘れていたわ。でも、谷川君の名前を聞いてドキドキしちゃった。

私、今ではすっかりワイドショーおばさんなんだけど、中学のころ、これでもね、小説読むの大好きだったのよ。想像出来ないでしょ。いつも図書室に行ってさ、谷川君は田舎の中学なのに、県下一斉テストではいつも県内十番以内に入って、先生達も一目置いて、口の悪い男子生徒は谷川君を名前で呼ばず『オイ一高』なんて意地悪していたんだけど……。谷川君は怒りもせず、飄々としていたの。それがね。私が図書室で本を選んでいたら……。谷川君がヘッセの「車輪の下」を持ってきて『これ、とてもいい本なんだ。読んでなかったら読んでみて』って、私に勧めたの……。私、その時から恋に落ちちゃって……。毎日学校に行くのが楽しかったわ。目が合うたび心臓が壊れそうに、動悸がしたの。

背の高い谷川君が一番後ろから答案用紙集めてきたときね。偶然指が触れただけで、その指を眺めて何日も幸せだった。私ね。父がとても厳しかったから今のように男女交際なんか出来なくて、いつも図書室で本の話ばかりしていたの。

本当にすっかり忘れていたわ。今では谷川君がどこに住んでいるかも、全然知らなかったし……、同級生が電話番号知らせてくれたので電話してみたの。四十年ぶりよ。声わかるかなぁって不安だったけど……。すぐ解ってね。頭の中は中学生の谷川君でいっぱいになって、とても幸せだった。

でもね、谷川君……脳腫瘍だったの。私一時間も話してしまったわ。これからベッドが空き次第入院して手術って言ったの。私訊いていて涙が出てしまったけど、平気そうにして、ベテランの病人らしく……。谷川君、大丈夫よ。ベッドが空き次第なんて言って待たせるなんて、悪かったらそんなこと言わず直ぐ入院だから……。きっとたいしたこと無いのよ。また電話するから、いつか、絶対お互いに生きていて会おうねって電話切ったの。なんだか、悲しいような変に幸せ気分だし……。心がほんわかして……。ときめく気分になっちゃった。手も繋がない。キッスもしない。何も無かったから良かったのかしら……。じぁ、秋子さん、またね。トキメキ復活の報告終わりですぅ。体気をつけてね」

ハイテンションで興奮状態の恵美子は一方的に話をし、電話を切ってしまった。家の中でどんなに大騒ぎしているのだろうと、恵美子を想像しただけでも、思わず笑みがこぼれ

た。しかし、恵美子の言った最後の言葉が、秋子の心に突き刺さった。

「何も無かったから良かったのかしら……」

何も無いことが良いこと……。吉野とのことも何も無かったら……。と、複雑な思いだった。恵美子の天衣無縫さが羨ましかった。恵美子の何も無かったからの言葉を心の中で何度も反芻しながら、窓の外に目を向けると、家を買った記念にと、公平が猫の額ほどの庭に植えたナナカマドが、いつの間にか赤い実をたわわに付けていた。今年は真夏日が連日続いていたのに、季節は確実に秋に向かっているようだ。

5

人は自分の生まれた季節が一番好きだと、訊いた事がある。晩秋に生まれた秋子は、その言い伝え通りに、枯葉が舞う晩秋が一番好きだ。そして、その季節になると、いつも元気になった。食卓テーブルに、公平が読んだ新聞が広げてあり、紅葉のメカニズムと各地の見ごろが書いてあった。

樹木は、気温が下がると、根からの水分吸収力が弱まり、葉がいつものように水分を発散させては木が枯れてしまうため、葉の付け根にある離層という組織が、コルク状に変化し、水分の発散を防ぐ。葉に水分をとられなくなった木は生き延び、葉は光合成で作った糖分を木の方に流さない為、溜まった糖分は酵素作用で赤や黄色の色素に変わり、あの輝く美しい紅葉となって、私達の目を楽しませてくれるという。そして晩秋になり葉は老化し落葉する。

そうだったのだ。秋子は恵美子も自分も、今まさに、離層が出来たばかりなのかもしれないと思った。恵美子がときめかなくなったと大騒ぎしたのも、吉野に出会い精神的に不安定になった秋子も、離層が出来たばかりで、私たちは病気が悪化し、初めて強いステロイドや免疫疾患に効くという抗癌剤を飲んだとき、体が様々な反応をするときの状態と同じように、閉経を迎えて精神的に不安定になっていたのだ。

トンチンカンな恵美子だが、主治医はいつも恵美子には笑みを見せ、看護師たちも恵美子のキャラをからかったりしながら楽しんでいる。なぜ恵美子は病気でもあんなに明るいのだろう。子どものころ小説を読むのが好きな文学少女だったなんて、今の恵美子からは想像もできないけど「あまりに痛くて、手も足も動かなくって……お風呂に入っていて蚊

が背中にとまって血を吸っても、追い払われなくてさ、悲しくて泣いたけど……終いには笑っちゃったわ」と恵美子が言っていたことを思い出した。

あのお笑い系は元々の恵美子の性格だと思っていたが、秋子より十年も早く病気になったことで生きていくための離層が出来、培われたキャラクターなのかもしれない気がした。生きてさえいれば、恵美子が谷川と巡り合ったように、いつか吉野と笑顔で話せる日が来るかも知れない気がした。生きてさえいれば、難病と言われても命は神様の思し召し……。

これから晩秋となり落葉するまでに、どんなに美しい紅葉を作ることが出来るかは、秋子のこれからの生き方なのかもしれない。秋子は洗面を済ませると、鏡に向い、久しぶりに紅を差した。